

明治以来、日本の工業を 縁の下で支えてきた木型

明治以降に発展した木型産業

同じものを大量につくり出す方法の一つが、型の中に溶けた金属や樹脂を流し込むことです。一般的には熱や圧力などでも変形しにくい金属で金型が作られます。その金型づくりで昔からおこなわれてきたのが、出来上がりの製品と全く同じものを木でつくり、それを元にして砂などを使い鑄型にする方法です。

日本における木型の歴史は奈良時代に仏像を製作した時に使われたのが最初ではないかといわれています。ただし鑄造品の需要はそれほど多くはなかったため、木型づくりの専門家はおらず、鑄物師や大工が必要に応じてつくっていたようです。幕末頃から西洋式の船が作られるようになると鑄造用木型



の需要が増大し、大工や指物師、建具職が木型工に特化していったようです。さらに明治になって日本が近代化への道を歩み始めると、金属機械や鑄鉄管が量産されるようになり、木型は必要不可欠となりました。

木から樹脂、ノミから NC 旋盤に変わっても産業に不可欠の木型

明治から大正にかけて、木型づくりはメーカーの製造工程の一部でした。それが企業として独立し、名古屋木型組合が作られました。戦時中は統制組合法の実施に伴い愛知県機械木型工業組合となりましたが、多くの工場が空襲の被害を受けるなどし、終戦の時には自然消滅しました。しかし昭和34年の伊勢湾台風をきっかけに名古屋木型共同会を設立し、同39年に名古屋木型工業協同組合となり今日に至っています。

木型は製品と全く同じでなければならず、それをノミ、カンナ、ノコギリを使い、10分の1ミリという精度でつくり出します。比較的単純な製品であっても、分割できるようにしたものや、いくつもの木型を必要とするものもあります。十分に乾燥させた

木を使い、気温や湿度の変化にも気を遣わなければなりません。最近は木型の材料に樹脂や石膏を使ったり、NC 旋盤を利用しているところも増えています。それでも、航空機、船舶、自動車の部品から家電製品まで、木型なしでは現代工業は成り立ちません。

DATA ■名古屋木型工業協同組合
所在地：熱田区白鳥二丁目12-12 熊沢ビル45号

- ・昭和初期：名古屋木型組合を設立
- ・昭和20年：空襲の被害により、組合が自然消滅
- ・昭和39年：名古屋木型工業協同組合を設立